

社寺建築 及 臺灣檜材の安價提供

(三年以上水蓄乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の計設又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候

追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木實見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

(充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水蓄不足充分なる檜材は于制狂ひ等の缺點多きものであります)

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地

(明治神宮外苑内日本青年館正門前)

社 寺 工 務 所

(電話青山六〇二八番)

神奈川縣 鶴見町

社 寺 工 務 所 鶴 見 支 所

福岡市外堅箱町馬出松原

社 寺 工 務 所 福 岡 支 所

(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社 寺 工 務 所 大 阪 支 所

(電話西三二二四番)

臺灣檜材の六大大特徴

- 一、耐久防腐
- 二、蟻害絶無
- 三、香氣清楚
- 四、木質堅緻
- 五、木理整然
- 六、木色高雅

一 統 定 價	
一 冊	金 貳 拾 錢
半 冊	金 壹 圓 貳 拾 錢
一 ヶ 年	金 貳 圓 貳 拾 錢
送 料 共	送 料 共 五 厘
送 料 共	送 料 共
金 前 之 事	金 前 之 事

一 統 告 料	
表 紙 一 百 頁	金 貳 拾 錢
一 頁	金 拾 五 圓
半 頁	金 九 圓
四 分 一 頁	金 五 圓
前 金 之 事	前 金 之 事

大正十五年 一月十七日印刷納本(第三百七十一號)
大正十五年 二月一日發行

不 許 複 製

編輯所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
印刷所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
社 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地

編輯所 名古屋市東區田代町字城山七十七番地
發行所 名古屋市東區千種町字五反田五二番地
社 名古屋市東區千種町字五反田五二番地

電話長五〇八七番
電話名古屋一〇八一九番

目 次

釋迦如來の名號……………	本 多 日 生
信行の基調を説ける觀音賢經……………	井 村 日 成
虎ちやん……………	中 村 に し き
罷 睡 錄……………	黃 薇 菴 青 村
怨嬉迷悟……………	古 田 昂 生
記事報導……………	

第 三 十 三 年 三 月 號

統

一

主筆 本多日生
教 第二號發刊

毎月一回十一日發行 部金拾錢郵税五厘半年以上前金ハ税不要何十部申込ムモ割引無シ

目次

- | | | | |
|---------------|---------|--------------|--------|
| 1、御製數首 | 本多日生 | 12、傳習録の一節 | 歐陽明先生 |
| 2、一切の勝利は人格にあり | 佐藤鐵太郎 | 13、勞働問題の解決 | 永井米藏 |
| 3、近時所感 | 素行先生 | 14、融和促進 | 本多日生 |
| 4、思兼の神 | 志賀重昂 | 15、義公隨筆 | 徳川光圀郷 |
| 5、世界當代地理 | 大日本史 | 16、惡思想の匡救 | 添田壽一 |
| 6、崇神天皇紀實 | 床次竹二郎 | 17、遺訓數節 | 南洲先生 |
| 7、信念と第二維新 | 聖德太子 | 18、國躰觀念 | 今泉定介 |
| 8、篤敬三寶 | モールスワース | 19、博愛と忠君 | 守護國界主經 |
| 9、社會主義評論 | 岩野直英譯 | 20、東洋思想の大共通點 | 本多日生 |
| 10、聖語數節 | 立正大師 | 21、雜報 | |
| 11、教養逸話 | 高嶋平三郎 | 以上 | |

東京市外品川町南品川四一二

「教」發行所

振替東京一〇九四〇

教義信條の整束 (其六)

(大正十四年七月十二日統一週に於ける講演)

釋迦如來の名號

リ、對宗よりの傍系……又、對真言關係の教義……ル、對天臺關係の教義……ヲ、對淨土關係の教義……ワ、經具法身の教義
カ、唱題行の正義……ヨ、經具法身の正義

リ、對宗よりの傍系

本多日生

釋迦如來の名號に就て申述べ來つたのであるが、釋迦如來は本體に於て絕對であると共に、釋迦如來は御名に於て廣大なる功德がある、然るに日蓮聖人は南無妙法蓮華經と唱へしめ、又曼陀羅の本尊の如きは、中央に南無妙法蓮華經と大書せられて居ることに於て、この唱題行と、曼陀羅の中尊が題目になつて居ることに於て、折角考へられた本佛の絕對といふこと、釋尊の尊さが横切るやうに考へ、或る者はなんとし、ても佛様は輕いのである、妙法が絕對である、斯様に考へる者があるのである。又或る者は本佛の絕對を信解することに於てどうも妙法が邪魔になる、これは恐多いから口外は出来ぬけれども、日蓮聖人の少しやり損ひではなからうかといふ風に考へる者も出来て居るのである。そこでこの唱題行といひ本尊の中尊の題目といふことが、釋尊と離れない關係であることを能く理解して、それが釋尊より上でもなければ邪

魔になるのでもなくして、洵に密接にこの題目の唱題の聲を耳にし、本尊の題目の文字を拜するに就て、益々本佛を渴仰する精神がピツタリ一如して行くところに、正しい日蓮教學の歸結があるのである。そのことを立證する爲に日蓮教學上の分類として、「經旨よりの正系」、「對宗よりの傍系」といふことを了解しなければならぬことを前回に申述べ、法華經の精神から傳はつて來るところに教義の正系があり、他の宗旨に對するが爲に——それはどういふ意味に於ての關係にもせよ、その影響に於て現れる教義には傍系的の思想があるといふことを鮮明に意識しなければ、この問題を解決することが出來得ないことを明かにし、さうして經旨よりの正系を論じて、それを二段に分けて理證、經證として、道理上の證明として本佛の絕對であることを、哲學的の論證といふか、本佛三輪の妙化を説明し、經證として釋尊の飽迄も絕對であること、さうして題目は斯様な意味に於て釋尊と調和して現れるものであるといふことを申したのである。

そこで是より「對宗よりの傍系に」就て、迷を起さないやうに、これを鮮明に解決して置きたいと思ふ。「對宗よりの傍系」といふことは只今も申すが如くに、必ずしもその宗旨に引摺られて行く意味ではない、或はその宗旨々の長所を綜合して來るが爲めに、それを統率して來るが爲めに、或はそれを誘引して來るが爲めに、或は時にはそれと同じものでより以上優れたものがあるといふことに依つて彼を對破せんが爲めに現はれる事柄も、いづれもそれは他の宗旨に就ての影響といふことに相成ると思ふのである。それ故にその影響の内容がどういふ意味であつたかといふことまでは茲に詳しく申述べる必要を認めないので、彼を引率して來るが爲めにもせよ、彼の考へて居るものよりも、同じやうなものでより尊といふものがある。

といふことを以て、彼の信仰を法華經に向はしめる爲にもせよ、左様な對宗的影響から來る思想はそれが絕對の教義ではないといふことを明瞭にして置かなければならぬのである。

それは大体は三つのことであるが、それに一つ附随したる問題があつて、四つほどのことになると思ふ。第一は眞言關係の教義、第二は天台關係の教義、第三は淨土關係の教義である、さうしてそれに附随する一つの解決を要することは、經典法身の思想に就て、これに伴ふ誤解を矯正してその正義を發揚して置かなければ、日蓮教學に於て釋尊と題目の關係が明瞭にならぬと考へる次第である。

又、對眞言關係の教義

先づ第一に眞言關係の教義に就て申すならば、その方から現れる教義は澤山御遺文の中に出て來るのであるが、いま暫く代表的に二三の點を擧げて、それに類似したものは推して知るべしといふことにして話を進めて行きたいと思ふ。(このことは大体自分の編纂した『聖語錄』の中には今申述べると同じ考で分類して居るのであるから、今更自分が斯ういふことを考へつた譯ではないので、モウ舊い研究であるが、近來だん／＼さういふことに日蓮主義の研究者が迷うて居るやうであるからこの事を申すのである) 先づ

『淨藏淨眼抄』に

妙法蓮華經の五字月と露れさせ給ふべし、其月の中には釋迦佛十方の諸佛、乃至前に立せ給ひし御子息の露れさせ給ふべしと思召せ。(聖語錄二二九頁)

斯ういふことが書かれてある、妙法蓮華經の五字が月のやうにパツと出て、その中にお釋迦様でも一切の

佛でも皆な包まれて居る、この間死なれたあなたの息子さんもその中に入つて居る、斯ういふことである。さうすると妙法蓮華經は全体を包括して居るところのお月様の光みたやうなものである、これが一番有り難いといふやうな考が起る。併しそれは即ち眞言的思想であつて、妙法を左様な意味に解するといふことは、これを理義から言へば萬有神教とも言ふべきものである、何でもその中に皆な包括されて居るといふことになるのであつて、斯様な意味は絶対の尊さをもつものではない。又『妙法曼陀羅抄』に

此妙法の曼陀羅は、文字は五字七字にて候といへども、三世の諸佛の御師一切女人成佛の印文也。

この妙法曼陀羅は文字は五字七字であつても、それが一切の佛のお師匠様であり、女が成佛する時分の印文といつて印になる、丁度經帷子に印を捺して貫つて居るやうな譯で、これさへ持つて居れば地獄に行つても鬼に捕まる氣遣ひはないといふ風な、印眞言のやうな意味からこの妙法曼陀羅を解説されて居るのである。斯ういふ教説が非常に有り難いことのやうに思つて、お題目の中に一切の佛もあり、女人が成佛するのでも、この文字さへ持つて行けば何處でも助かる、斯ういふ風に言つて居るのであるが、これ等は全然眞言系統の思想である。それからいまつ『日女抄』に

妙法五字の光明にてらされて本有の尊形となる、是を本尊と申す也。(聖語錄二六二五頁)

一切の佛、釋尊以下總て妙法五字の光明に照されて佛に成つて居るのである、五字の光明が絶対のものである、それだからお題目の文字が跳ねてあるのである、斯ういふことを考へる。先づ大抵の平凡な坊さんや素人の信者は、お題目の光の中で、妙法五字の光明に照されて皆な佛に成るのだ、斯ういふ風に考へて

居る譯であるが、左様なことは哲學的思想から考へても、又法華經の意味から考へても、決して尊い意味を有つものではないのである。斯ういふ思想の缺點はこれ迄に論明したところの、宇宙神教と統一神教の關係、さうして法華經の教旨は本佛の三輪の妙化にあるといふことを明瞭にすれば、斯様な眞言關係の思想は日蓮教學の第一義ではないといふことは自ら明瞭になることである。そのわからなかつたのは本佛の絶対の意義を研究することが薄いからわからなかつたのである、斯ういふことが法華經の大精神でないといふことは直ぐわかることである。斯んな漠然たる譯のわからぬものが決して法華經ではない、考へて御覽なさい、五字が月に露れたとか、五字の光明に照されてとかいふやうなことは、全く法華經の教義ではない、それは眞言的に言へば意義が出て来る、文字が有り難いとか言葉が有り難いとかいふて、印眞言といふものを絶対に見るならば、そこに意義が出て来るけれども、法華經はさういふ思想を排斥して起つて居るお經である、これは日蓮聖人の他の場合に眞言を對破する御遺文に於て明瞭に論明されて居る事である。

ル、對天台關係の教義

第二には天台關係の教義であるが、それは十界互具とか、實相とか、一念三千とかいふ觀念的に現れて来る思想である、『當體義鈔』に

十界の依正即妙法蓮華の當體なり。(聖語錄二三一頁)

妙法蓮華といふものは地獄から佛までの總てそれらの相及びそれ等の世界、その全体が皆な妙法蓮華經で

ある、斯う言ふのである、これは所謂萬有神教である、斯様な妙法が決して日蓮教學上の尊い意味ではない、又『初心成佛抄』に

我が己心の妙法蓮華經を本尊とあがめ奉つて。(聖語錄 三四六頁)

と書いてある、本尊といふものは自分の心の中にある、それを妙法蓮華經と言ふ、だから本尊といふものは、我が心に内在するもの以外に佛があるのではないといふ己心本尊の思想である。これ皆な天台の觀念としては認められるけれども、日蓮聖人の信行としては意義をなさぬことである、自分の心をそこへ描き出して、それを向ふへ祀つて拜むナンといふことは、洵に意義をなさない言ひ草である。併し斯ういふことを何等吟味をせずして今迄は濫用し來つて居るものである。又『日女抄』に、先には「五字の光明にてらされて本有の尊形となる」といふやうなことを言つてあるけれども、直ぐその次の所に

此の御本尊全く餘所に求むる事なかれ、只我等衆生法華經を持ちて、南無妙法蓮華經と唱ふる胸中の肉團におはしますなり。(聖語錄 三二六頁)

題目を唱へる行者の胸の中にある本尊である、斯ういふことが言つてある、これは前の『初心成佛抄』の「己心本尊」と同じことである、觀念系に屬する天台の影響から來る思想である。又『草木成佛抄』に

一念三千の法門をふりすゝぎたてたる大曼荼羅なり、當世の習ひそこないの學者ゆめにもしらざる法門也。(續遺七四六頁)

日蓮のあらはす法門は、一念三千の法門をふりすゝいで、それに伴ふ弊害の去つて、その教義をその儘曼荼羅にうつしたのであると言はれて居る、これは明かに全然天台の觀念系の思想が一轉して本尊に來て居

る有様である。これらの思想の缺點は臍な機械的關係といふものである、機械的關係といふのは十界の衆生その儘の關係で、それが善良な精神を起す起さぬに拘はらず、信心をするしないに拘はらず、十界の當體が即妙法であるといふことであれば、地獄もその儘妙法であり、餓鬼も親殺しも泥棒も、皆なそれがその儘妙法の當體であるといふことになるのである。斯様な機械的關係といふものは、それは迷へる者でも正・因・佛性といふものを有つて居るからして、その點から言へば互に共通をして居るけれども、それでは道徳も宗教も成立つものではないのである。そこに機械的關係でなくして、精神的關係が大切なのである。佛様の方は慈悲を以て衆生を救はんとし、我等は覺醒して善心に立歸つて信心を起し、渴仰を起し善根を積んで行くといふ發心信仰のそこに、始めて道徳宗教は發生して來るのである。その佛の慈悲と我々の覺醒と兩方の結付く所に、本當の道徳宗教は生じて來るのである。信心してもしなくとも皆な十界互具ちやといふやうな機械的のことを言ひ放しにするのは害有つて益無きことである、さういふことで宗教も道徳も發生するものではない。それは凡そ大乘佛敎の共通の弊害となつて居るのである、天台でも眞言でも禪宗でも日蓮教學の習ひ指ひでも、皆なそんなやうなことを言つて、寧ろ無條件で平等論を主張することを以て得たりとして居るのである。果してさうとするならばこれは非常な破壊運動である、善も無く惡も無い、道徳も無い、宗教も無い、萬事放擲して置いて、その儘互に互具融即して居るものである、手を着けるだけ餘計なことだ、手を着ける者は寧ろ罪人である、救つてやるとか、啓發してやるとか、改過遷善せしむるとかいふ努力は愚なことである、そんなことをする奴が一番いかぬといふことになる、即ち釋尊が一番餘計な事をした者だといふことになるのである。左様な思想を道徳宗教の上に認容することの出來な

いのは自明の理であつて、多く論辯する必要は無い。これを佛性論に就て云へば正因佛性より造んで縁因佛性に向ひ、更により以上了因佛性に向ふことに於て宗教道德があるのである、單に正因佛性だけを認め、てそれで宜しとするならば道徳も宗教も無い。さういふ必然的、自然的、機械的なことに於て結論を與へんとするのは教學上の大誤解、大邪見であるといふことに徹底して置きさへすれば宜いのである。それから判斷をして行けば快刀乱麻を断つが如きものである、その事もいま更私が言ふまでではない、モウ數年來一貫してその主張をあらゆる書物の中にも講壇の上にも力説してやまない者である。これが天台影響の教義と日蓮の純粹の思想との分界點であつて、頗る大事な點である。

チ、對淨土關係の教義

第三には淨土關係の思想であるが、これに就ての遺文は多くは唱題行の方に屬するので、天台眞言の影響は曼陀羅に就ての事が多いのであるが、淨土關係の方は唱へるといふ方のことから影響があるのである。「法華題目鈔」に

只南無妙法蓮華經と計り五字七字に限りて一日に一週一月乃至一年十年一期生の間に只一遍なんぞ唱へしも、輕重の惡に引れずして四惡趣におもむかずついに不退の位にいたるべしや、答て云くしかるべき也。(續遺五八三頁)

たゞ何の考も無く一生の間に一遍唱へたら、如何なる重い罪があつても惡道にも落ちずして、終ひには佛様に成れますか、それは成れる、斯ういふ答がしてある。これが一番安價な安心で、淨土門の所謂易修

行と競争する爲に現れた思想である。最初は確かに日蓮聖人も斯ういふことを唱題行として言はれたに違ひない、ところがこの思想が割合に普及し過ぎたのである、その普及し過ぎたのは下手な説教坊主、學問の無い説教坊主や、或は中世の人が御遺文の拔萃をやつた時分に、これが一番受けが宜いといふので、當時の日本人が低級であつたが爲に、一期生の間にたゞ一遍、義理をも知らず味ひをも知らず、迷信でも何でも構はぬ、一生に一遍南無妙法蓮華經と言つたならば、惡道にも落ちず必ず佛に成れる、こんな易い事は無いといふので、これが非常に流行つたのである。斯ういふ思想は大いに注意を要する事なのである、これは淨土宗の易修易行の安心からの影響である、法華經の教義は決して斯様な無條件的なものではない。それから又「唱法華題目鈔」には

本尊は法華經八卷一品或は題目を書いて本尊と定むべしと法師品並に神力品に見えたり、又たへたらん人は釋迦如來多寶佛を書いて造つても法華經の左右に之を立て奉るべし。(續遺三四〇頁)

斯ういふことが書いてある、これも洵に多含的のもので、本尊といふのは法華經一部でも宜し、題目を書いても宜し、又お釋迦様を加へても宜しといふやうな意味で現されて居るのである。これが又本尊勸請には非常に應用されて、乱雑なる法華宗の本尊勸請といふものが起つた、題目でも宜いのである、お釋迦様でも宜いのであるといふことから、今度は好い加減に何でも宜いといふやうな意味で「たへたらん者は」といふことから雜然たることになつたのであるが、果して斯様な「法華題目鈔」又「唱法華題目鈔」のやうな思想が最後まで日蓮聖人の認めたものかといふと決してさうではない。斯様に法華經の意義を明かにせず、信仰の意識内容を審かにせずして、漠然と題目さへ唱へたら宜いといふこの安心は最後まで許され

たものではないのである。これは佐渡己前に書かれて、淨土影響の教義として一時的に現れて居るけれども、同じ唱へて居る題目でも、後にはその意義を明かにし、意識を闡明にして進んで来たところに本當の題目があるといふことを明瞭にしなければならぬのである。その意味は特に明かにして置く必要があるから、後に詳しくお話をしようと思ふ。

ワ、經典法身の教義

モウ一つこれに附随して居るのは、宗旨的關係ではなくして釋尊の滅後に起つた佛教信仰の中からして、經典法身の思想といふものが現れた。釋迦如來は入滅せられたけれども、お経は遺つて居る、それはお釋迦様の精神を傳へたものだから、お経それが即ち佛様であるといふので、最初は佛を渴仰する精神より起つたのであるが、實在の意識が明瞭でなかつた爲に、佛様は何處へお出でになつたかはわからぬけれども、それがお経になつてこゝにある、これは間違ひなく釋尊のお心であるから、これを見ればこゝに佛様を在ませりといふ考が湧くところからやつたのである。その經典法身の思想には、一つの間違つて来る側の考と、正しい意味に應用される考との二つがあることを知らなければならぬ。間違つて来る方の考はお經が無暗矢鏢に有り難くなつて来る、お經が有り難いといつたら佛様などは蹴飛すやうな考が起る。今の法華宗の大部分はさうである、法華經が有り難いといふことは知つて居るが、佛様などはどうでも構はぬ、「私は法華經と鬼子母神」→私は法華經と帝釋様、「私は法華經とお祖師様」といふやうな譯で、本佛釋尊は何處かへ蹴飛してしまふ、斯ういふ思想ぐらゐ罪惡なものはない。それは經典法身の思想に伴ふ所の大

謬見である。もとゝその思想の起因は釋尊を渴仰するが爲に、お經が佛の御精神を傳へたものである、肉身滅すと雖も法身存す、法身は即ちお經ぢやといふやうな考でこれを渴仰したのである。この題目を唱へることゝ、文字を有り難つて居ることゝの二つは、日蓮教學上何處までも違つるのであるから、淨土關係から来た唱題行ではあつたけれども、其本當の精神と、それから經典法身の思想の影響から来たことではあるけれども、その本當の精神とを明かにして、曼陀羅に書いてあるお題目の有り難い意味合、吾々が唱へる題目の意味合を間違はぬよう歸結を明かにしなければならぬのである。それが最も大事な問題である、題目を邪魔にする者もいけないし、題目の爲に釋尊を忘れるのもいけない。釋尊を思ふが爲に題目を邪魔にするといふ間違ひと、題目の爲に釋尊を忘れるといふ間違ひと、この二つの邪見に對して今論明しつゝあるのである。

そこでこの經典法身の思想の影響に就て御遺文の中から引證して見れば『本尊問答鈔』に
問ふて云く、末代惡世の凡夫は何物を以て本尊と定むべき耶、答へて云く、法華經の題目を以て本尊とすべき也。(聖語錄三四七頁)
とすべき也。(續遺一七九四頁)

とある、この本尊問答鈔に於て法華經の題目が本尊だと明記せられたことに依つて、意味もわからずにこれを金剛玉條として振廻す人が出来て居るのである。同じく又『本尊問答鈔』に

此御本尊は世尊説きをかせ給ひて後、二千二百三十餘年の間、一閻浮提の内に未だ弘めたる人候はず。(聖語錄三四九頁)
はす。(續遺一八〇七頁)

「此御本尊は世尊説きをかせ給ひて」といふのであるから、お釋迦様が説かれたお經である、即ち法華經

の題目であるといふことになつて居る。これを振廻して、法華宗の本尊は題目である、題目とは法華經である、斯ういふ考で法華經を尊んで佛を侮辱する所にこれを使はんとする者がある。もと／＼經典法身の思想は佛を懂れる精神から現れたものであるに拘はらず、その經典を尊ぶが爲に佛を侮辱するといふ方へ行つて居る。それが正しいか否かといふことは、お經に歸つて研究して見たならば直ぐ分ることである、この場合には日蓮聖人の聖訓の末を遂うて居つては正邪がわからない、それは法華經の本經に依つて、その經典法身の思想が佛を侮辱するのかわらないのかといふことを十分に見なければならぬ。又一顯佛未來記」に

此の人は守護の力を得て、本門の本尊妙法蓮華經の五字を以て闍浮提に廣宣流布せしめん歟。

(要語録三五頁 論道九七五頁)

妙法蓮華經の五字が本門の本尊だといふ風に現はれて居る。それは能く了解すれば、妙法を本尊といふも、釋尊を本尊といふも、曼陀羅を本尊といふも皆な一つになつて來るのだけれども、妙法と言はれ、釋尊が飛んでしまひ、釋尊と言はれ、ば妙法が逃げてしまふといふこの考の間は、永久に日蓮教學の葛藤はやまないものである。

そこで元來は斯ういふ經典法身の思想は、お釋迦様の涅槃をせられたに就て、その實在の意義がわからなくなつたところから來たのである。お釋迦様の肉身滅し給ふた、ごうなさつたか、消えられたものであるまいけれども、ハツキリせぬから、そこで御靈蹟を參拜したり、或は佛舍利を渴仰したり、或は經典を崇拜したり、木像を造つて渴仰したり、その尊い佛様を敬慕する爲にあつちへうろつきこつちへうろつきしたのである。そこでこの經典が有り難いといふ考は、釋尊の人格實在といふことが善量品のやうに、ちやんとそこにお在でなさるといふことがハツキリして來たならば、法華經を大切にすることからと言つても、ちやんと茲に實在の本佛がお在でになつて、この法華經を説いて聽かして下さるのであるといふことになつたならば、この佛を捨てるといふ考は少しも出て來る者ではないのである。その人格實在がハツキリわからぬものであるから、たゞお經の方ばかり有り難がるのであるけれども、活ける本佛がそこにちやんとお在でなさるといふことが意識明瞭になつたならば、この經典崇拜の觀念といふものは、根本へ戻つて本佛渴仰の精神に引きつけらるべきものである。お題目が有り難いといふのも、本佛を意識することとが弱いものであるから、そこで字が有り難いといふ所から鬼子母神が出て來たり、帝釋へ飛んで行つたりするのであるけれども、ちやんと本佛はいつも吾が側にお在で下されるといふ觀念が明かになつて歩々念々時々刻々本佛を敬慕する精神があつたならば、經典法身の觀念はズツと薄く考へられて來るのである。そのわがからぬやうな學者は逆も善量品を讀み得た者でもなく、題目鈔を讀み得た者でもなく、日蓮教學の心髓に觸れた者でもない、往いて言へば佛敎の信仰の妙味に觸れない者である。そこでこの點を更に明瞭にして置きたいと思ふ。

力、唱題行の正義

最初の唱題行に關してはごういふ具合に考へて行つたら宜いかといふと、同じ修行でも、言葉は一つでも、内容が變つて來ることを知らなければいかぬ。それは「三澤鈔」に

又法門の事は佐渡の國へながされ候し己前の法門はたゞ佛の爾前の經とをばしめせ。(續遺一〇七五頁)
 と仰せられたのはまさしくそこを言はれたのであつて、何等の意義も心得ず、口先ばかりで唱へたら宜いといふやうなさういふ意見は佐渡己前の説である、佐渡以後に至つてはさういふことを許さない。それは「報恩鈔」に題目を解釋するところに能く出て居るのである。

阿含經の題目には大旨一切はあるやうなれども但小釋迦一佛ありて他佛なし、華嚴經、觀經、大日經等には又一切有るやうなれども二乗を佛になすやうと久遠實成の釋迦佛なし。(續遺一五〇四頁)

一切經の題目といふものは、そのお經の内容を表現して居るから有り難いのである。阿含經の題目はいろ／＼あると言つても、一番有り難いのは小乘のお釋迦様しかないことになる。華嚴經や觀經や大日經の題目が尊いといつても、そこに二つの大きなものが缺けて居る、即ち二乗を佛にする力と、久遠實成の本佛を顯すこと、この佛性論と本佛論の二大教義が缺けて居る、だから題目が價值が無い。法華經の題目が價值が有るといふことは、二乗を佛にすること、本佛を光顯したることがその中に含まれて居るが故にこの題目に價值が有るといふことになつて居るのである、内容が空虚でも宜いといふことは言へない。併し「妙法蓮華經」といふその言葉が非常に宜いぢやないかといふならば、妙法蓮華經といふのは何も法華經の題號には限らない、これは觀經といふ念佛宗のお經の中にも妙法を説くといふこともあり、又その他のお經にも澤山出て居る言葉であつて、妙法といふ言葉が法華經に於て始めて出來たものでもない、同じ妙法といふ言葉でもその内容に依つて違ふのである。たゞ文字の妙法といふやうなことは、舊い所に神道から出たものもある、女の惚れる妙法だとか、瘡氣の癒る妙法だとかいつても、そんな妙法といふものは

サウ偉いものではない。これもたゞ印度式に言葉に絕對の意義を含めて言ふやうな思想から印眞言的に言へば、「妙」といふ字が非常にえらい。「妙」にはいろ／＼の意義があるといふことは言へるけれども、左様なことは教學上の極意ではないのである、たゞ言ひ來りの傳説である、印度の傳説に過ぎない。それは丁度大本教などが「め」といふ字に非常に意味があるとか、「か」といふ字に非常な意味があるとかいふやうなことを言ふ、言靈學といふやうなものと同じである。さういふものではない、人間の使ふ言葉といふものは二つ以上合して意義をなして來るのである、そんな譯のわからぬことを勝手に意味をくつ附けて「ラララ」といふやうなことを言つて居る、それは何のことぢや、それは斯ういふことぢやナンと言つて好い加減なことを大本教などで言つて居る、それと同じやうに「妙」とか「法」とかいふやうなことが非常にえらいといふのは、印度の言葉の解釋に附いて居ることである。それは日蓮聖人もさういふことを引かれられるけれども、そんなことは有りふれたことで、何も日蓮聖人の發明ではない。「妙」といふ字は日本で言うても餘程善い字には違ひない、「それは妙ぢやナ」といふやうな意味である、だから妙といふ字は何にでも使へる、この間支那人が手品をやつて、風呂敷の中から井鉢に水を一パイ入れたのを出した、「あれは妙ぢやナ」と言ふ、それも妙である。併しその内容が井鉢の妙と、釋尊の本佛を光顯した妙と、その内容に依つて妙の價值といふものは違はなければならぬ。そんな言葉のみを以て説明して居るといふことは愚なことである、さういふことはその時代の影響で日蓮聖人の御遺文などにも使はれるけれども、本尊鈔にはこの妙の具足の義を釋尊の四行果徳の功徳を具足する義に取られたので、この點を充分に考ふべきである、それには日蓮教學の洗練といふことをして行かなければならぬ。

そこでこの「報恩抄」に書かれた題目といふものは、内容に依つて價值が違ふといふ言葉に餘程力強く考へなければならぬ。「法華題目抄」に言ふやうに、義理を知らず、味ひを知らず、たゞ口に言ひさへすれば宜い、それも一生に一遍言へば宜いといふやうな、そんな軽いことで法華經の意味は解けるものではない。それから「富木抄」に

日蓮が法門は第三の法門なり、世間に相夢の如く一二をば申せども第三をば申さず候。(續遺一六四八頁)
 これは有名な御書で、この「第三」といふことは、三種の教相といふものがある中の第三番目に位することとて「師弟の遠近不遠近」といふのであるが、即ち本佛の顯本を明かにするのが日蓮の法門であるといふことを言はれて居るのである。この「日蓮が法門は第三の法門なり」といふやうなことを明かにしなかつたのが、佐渡已前であつて、たゞ題目さへ唱へたら宜いといふやうなことになつたのであるけれども、どうしても日蓮主義は本佛の顯本を明かにすることに於て始めてその特色があるのである。

それから「開目抄」の如きは全文その意味に依つて現れて居るので、開卷第一から、

一切衆生の尊敬すべき者三つあり、所謂主師親これなり。(續遺七四七頁)
 一切衆生の敬ふべきものが三つある、即ち主師親である、所謂人格者である。字が有り難いとかそんなことを言つて居つては駄目である、字などといふものは末のものである、文字が非常に有り難いといふのは真言的思想である、印眞言を以て絶対として、さうして本佛の顯本を輕いとする。その事は他の場合に日蓮聖人が「劣謂勝見の外道」といつて、劣れるを勝れたりと謂ふ外道である、文字が絶対たといつて本佛を輕く見るのは外道であるといふことを極論されて居る。この第三の法門を日蓮教學をやつて居る者が

その時々に忘れましといふやうなことで言ひ譯の立つべきものではない、何處まで行つても法華經の特色は、絶対の主師親を光顯してその人格を顯した所にあるのである。「向ふが南無阿彌陀佛を言ふから、こつちは南無妙法蓮華經を始めました」向ふは鐘を叩くからこつちは太鼓を叩きます……そんな譯のものではない。宗教の根本生命であるところの宇宙の絶対の大人格者を光顯する、それに伴ふところの思想が完備して居るところに日蓮教學の妙處はあるのである。それ故に「開目抄」に

壽量品を知らざる諸宗の學者は畜生に同じ。(續遺七九二頁)
 と言はれ、又

諸宗の學者等近くは自宗に迷ひ遠くは法華經の壽量品を知らず、水中の月に實の月の想をなし。

(續遺七六五頁)

と論斷せられた、日蓮門下の者と雖も、この壽量品の妙味に達せんければ幾ら題目を唱へても何にもならぬのである。本門の題目と特に銘を打つのはそれが爲めである、たゞ題目を口で言ふだけならば本門も迷門も何もあつたものではない、フラテンの題目といふものである。どうしても本佛を敬慕渴仰する所より出で、題目といふものは現れて來なければならぬ、故に「顯勝法抄」には

涅槃經三十六に云く我契經の中に於て説く、二種の人あり佛法僧を謗すと、一者不信にして曠患の心あるが故に、二者信すと雖も義を解せざるが故に。善男子若し人信心あつて智慧有ること無き、是の人は則ち能く無明を増長す、若し智慧有つて信心有ること無き、是の人は則ち能く邪見を増長す。善男子不信の人は曠患の心あるが故に、説いて佛法僧實有ることなしと言はん。信者は慧無く顛倒して

義を解するが故に、法を聞く者をして佛法僧を誇せしむと云々(中略)顛倒解義とは實經の文を得て權

經の義を覺る者なり。(續道四五頁)
詳しく涅槃經の文を擧げて、信すと雖も信せざるものである、何故かと言へば、その經文の義に反するが故に、顛倒して義を解するが故に、實經の文を得て權經の義を解するものである、斯う言うてある。だから續ひ法華經を信じます信じますと言つて見たところが、その信仰の内容が法華經の義に反して居つた時に於ては、顛倒解義者であるが故に、實經の文を得て權經の義を解するものである。續ひ法華經のごん有り難い經文を讀み、南無妙法蓮華經と唱へて居つても、頭腦の中が外道婆羅門になつてしまつて、鬼子母神や帝釋を有り難かつて居るならば、それは佛法でないかも知れない。大体鬼子母神などといふものは婆羅門の神である、人の子を取つて喰つて居つた鬼である、それが病人を癒してやるといふやうなことは決して言うて居らない、非常な悪い事をして居つたのが改心をして、法華經を宣傳する法師沙門を擁護しよう、法華經の宣傳の場合には反對者が多く現れて、或は石を投げたり刀を振つたりする者があるから、その時分には自分が出て腕を捻上げてやらうといふ譯で「宰る我が頭の上にはのぼるとも法師を憐れすこと莫れ」といふので「宰上我頭上莫憐於法師」といふ誓ひを鬼子母神は立てたのである。即ち法師沙門を擁護するところの神様であつて、決して病氣を癒してやるナンといふことは後にも説いては無い、それを鬼子母神様は病氣の神様だと思つて、さうして陀羅尼品が病氣の祈禱の經になつて居る。陀羅尼品の如きは皆な法師擁護の經である、さういふ俗信迷信となつて南無妙法蓮華經と唱へて居るのは、これは親鸞上人も言うて居るが「外儀は佛法に似たれども内心外道を歸敬せり」といつて、形から言へば佛教のやう

に見えて居る、手に珠數を持ち、頭髪を剃つて、法華經を讀んで居るから佛教のやうであるけれども、その信仰意識を見れば、その儘外道であるといふことを親鸞上人も言うて居る、日蓮聖人もやはりさう仰しやるのである。それは佛法共通の思想である、形さへ頭髪を剃つて手に珠數を持つて居れば、頭腦の中で何を考へて居つても宜しいといふやうなことは、一切經何處にも許さるべきものではないのである。意識信仰を吟味せずして、たゞ言葉を知つて居りさへすれば宜しいといふ、そんな豆蔵みたやうなことを佛法で許す譯がない、それは曾に佛法を棄すのみではない、社會に非常な害毒を流すものである、宗教ありと雖も宗教の用がなさない。であるからこの「顯謗法抄」に、信すと雖も信せざるものである、實經の文を得て權經の義を解するものである、顛倒して義を解する者は信する者ではない、法華經を信するならば法華經の教にピッタリ合ふやうに意識しなければいかぬといふことを詳しく論せられた、それは當り前のことである。

それから「顯立正意抄」といふ御遺文に

今日蓮が弟子等も亦是の如し、或は信じ或は伏し或は隨ひ或は從ふ、但名のみ之を假つて心中に染ます、信心薄き者は、設ひ千劫を経すといへども或は一無間或は二無間乃至十百無間疑ひ無からん者歟。(續道一〇七五頁)

と説かれた、これは不輕菩薩に反對をした者が後に改心をして、法華經の信心をしたけれども、本當に精神から法華經に来て居ない、たゞ好い加減なことを言うて心中に染ます、法華信者でござると言つて、珠數を掛けて南無妙法蓮華經を唱へて太鼓は叩いて居るけれども、心の中には法華經の教の主意がちやんと

染み込んで居ない者は、一千劫の永き間地獄に墮ちるといふことは無いにしても、一無間二無間乃至十劫百劫の間地獄に墮ちることはあるかも知れないといふことを言はれて居るのである。法華經を信じさへしたならば——たゞ信ずると口で言ひさへしたならば、法華經の教に違つたやうな事をしても通用するといふやうなことを法華經は許さないのである。それは又許す譯がない、法華經でなくとも阿含經でも許さぬそれは恐らく天理教でも許すまいと思ふ、天理教の信心といつたら、腹の中では泥棒をする積りでもたゞ表面だけ信心するやうな顔をして居れば宜いかといつたならば、「そんな事はいかぬ」と言うだらう。教を信ずるといふことは、たゞ口先ばかり真似をすることでは無いといふくらゐのことは何時も考へなければならぬ。南無妙法蓮華經と口だけで真似したならば、法華經の中に説いてあることに反對の觀念を有つて居つても宜しいといふやうなことを許すといふことがどうして出来るか。

それで唱題行のたゞ無條件でお題目さへ唱へたら宜いといふやうな、さういふ淨土門の影響のやうな教義を大切にしないで、何處までも法華經の意義に適ふやうに信仰意識を明瞭にして本佛を渴仰する精神から唱へなければいかぬ。さうしてこれまで屬々論じたが如くに、本佛の絶對を考へて行かなければならぬと思ふのである。

ヨ、經典法身の正義

その事は前回に餘程詳しく申述べてあるので、理證、經證の二つを擧げて、題目と釋尊の關係は殆んど遺憾なく解決してあるのであるから、再び繰返す必要を認めないのであるが、モウ一つ經典法身の思想の誤謬に陥る點をお經文の方から明瞭にして置きたいと思ふ。

それは「法師品」に

藥王當に知るべし、如來の滅後に其れ能く書持し、讀誦し、供養し、佗人の爲に説かんと者は、如來則ち衣を以て之を覆ひたまふ爲し、又佗方の現在の諸佛に護念せらるゝことを爲ん、是の人は大信力、及び志願力、諸の善根力有らん、當に知るべし、是の人は如來と共に宿るなり、則ち如來の手をもつて其の頭を摩でらるゝことを爲ん、藥王在々處々に、若は説き、若は讀み、若は誦し、若は書き、若は經卷所住の處には皆七寶の塔を起て、極めて高廣、嚴飾ならしむ應し、復舍利を安ずることを須ひす、所以は何ん、此の中には己に如來の全身有す。(繪圖法華經二五一頁)

この文章を能く考へるとわかるのである、如來の滅後にこの法華經を持つたり説いたりする者は如來則ち衣を以てこれを覆ひ給ふ、法華經を信心すれば佛が可愛がつて下される、直ぐ佛と法華經とは離れないやうに説いて行くのである。そこを考へなければいかぬ、法華經を信じたら誰が護つて下さるか、鬼子母神ちやとか、帝釋ちやとか、狐ちやとかさういふ所に行くべきものではない、法華經を信すれば如來衣を以てこれを覆ひ給ふ、佛様といふことが直ぐ出て來るのである。さうしてその人は如來と共に宿り、如來の手を以て頭を摩でて戴く、それ故に何處でも法華經を持つに就ては、佛様を大切にしなければならぬ、法華經を大切にさへしたならば別に佛舍利を求めなくとも宜しい、法華經を信するその中に佛様の全身がゐますが故にといふことが説いてあるのである。この「舍利を須ひすその中に己に如來の全身有す」といふことが文字の方にくつ附いて、文字がその儘佛ちやといふ考へ方もある、併しその考へ方は拙いので

ある。文字が佛ちやと言ひ居ると、終ひに文字ばかりになつてしまつて佛が無くなつてしまふ。それから又哲學的に理論的に文字即佛と言つて、字が佛ちや、だから字が光るやうに曼陀羅の南無妙法蓮華經の字は跳ねてある、斯ういふやうなことを言ふけれども、これ皆な眞言的の觀念から出ることである、法華經の思想はそんな譯のわからぬことは言はぬのである。文字が佛ちやと言つても、さうではない、この法華經を信じて居れば、その信仰意識の中に「我常に此に在つて滅せず」といふ經文は、此處にちやんと佛様がござるといふことである。「而實不滅度」、實には滅せずといふ所が有り難いのである、字が有り難いといふのではない。文字はその事柄を示して居るものである。大体今日の佛敎といふものは餘りにお經の文句に拘泥し過ぎて居る、お經に説いてあるところの意味を考へないで、たゞ棒讀みにして「ジャブ〜」言ふから變なことを考へてしまふのである、これは非常な悪い事である。前にも申した、幸ろ我が頭の上にも法師を極すこと莫れ」とと棒讀みにしてしまふものから、病人の枕許へ行つて御祈禱をしながらこれを讀んで居る、若しもこれを誦讀して見たならば妙なるものである、病人に向つて「幸ろ我が頭の上にはばるとも法師を極すこと莫れ」……何の事だか意味をなさない、それを「ジャブ〜」と棒讀みにしてしまふものであるから、病人でも何にでも、その言うてあること、反對の事でも何でも出来るやうになる。左様にお經といふものを棒讀みにしてしまつて、聲ばかりの佛敎となるといふと、所謂「孝經」を以て父母の頭を打つが如く、法華經を以て本佛を侮辱することに使ふやうな間違ひを生ずるのである。この法師品の、法華經が有り難い、さうすれば佛が讀めて下される、法華經さへ大事にすればそこに佛がござるといふ意味が、經典法身の誤謬の方に墮落して佛を

忘れるといふ方ではなしに、佛に近づく觀念に考へさへしたならば、これはこの儘非常な尊い經文である。それは何處までも本佛と離れない方に解釋すべく、前提をそこに置いて經文を見て行かなければならぬ、それが開顯の眼を以て法華經を讀むといふことである。たゞ言葉ばかり覺えて、さうしてその問題に衝かれば又忘れてしまふ、それは馬鹿といふものである。一旦壽量品に依つて開顯の眼を得たならば、斯ういふ文章をこれを佛から切り離して見れば斯ういふ弊害が起る、これを佛の方に引きつけて斯う解釋すれば活きて來るといふやうに、壽量品の經意に入つてこれを活きるやうに解釋するのを開顯の眼といふのである。

それから「寶塔品」に次のやうな經文がある。

其れ能く此の經法を護ること有らん者は則ち我れ及び多寶を供養するになりぬ。(縮、法華經二七〇頁)

この法華經を護ればそれが釋迦牟尼佛及び多寶佛を供養したことになるといふのである。これも釋尊を供養することの有り難いことは既に言まつて居るから、このお經を護ればそれが佛に忠實なるものである、我を供養したと同じ功德があるを仰せられたのである。法華經を大切にする者と佛を供養する者とを離さずして進んで居るのである。それから此經難持の前文の所もその意味である

我れ佛道の爲めに無量の土に於て始めより今に至るまで廣く諸經を説く、而も其の中に於て此の經第一なり、若し能く持つこと有らんものは則ち佛身を持つなり。(縮、法華經二七三頁)

一番善いお經であるから、法華經を大切にすれば、モウ佛を大切にし、佛を護つて居ると同じものであると説かれて居る、この「若し能く持つこと有らんものは則ち佛身を持つなり」といふことは佛と離れる意

味でなくして、お経は紙に書いた字のやうに思ふけれど、この法華經を大切にすれば活ける釋迦牟尼佛に會ひ奉つて、これに忠實に御奉公すると同じ功德があるといふことを獎勵されたものである。佛様に供養することの有り難いことは既に定まつて居つて、誰でもわかつて居るからして、そこで「佛身を持つになりぬ」と言はれたのである。例へば聯隊旗を大切にすることは、陛下と思へど訓示すると同じことである、軍隊に於て聯隊旗を考へるならば、それは活ける陛下が有り難いといふことが前提としてわかつて居るからして、「これはたゞの旗と思つてはいかぬ、そこに陛下に代つて聯隊旗があるのだと心得よ」といふことになるのである、それを「陛下を敬ふといふことはわかりませぬが」……と言つて聽きなほすやうな者は、日本人ではないと言はなければならぬ。法華經を有り難く思ふは佛を大切にすると同じと言はれて、その佛の方が抜けて行くといふやうなことは實に心得違ひの坊主が多かつた譯である。

それから「神力品」の彼の四處の道場の前後の文章といふものは如何にも善いのである。所在の國土に若は受持し讀誦し解説し書寫して説の如く修行すること有らん、若は經卷所住の處、若は園の中に於ても、若は林の中に於ても、若は樹の下に於ても、若は僧坊に於ても、若は白衣の舍にても、若は殿堂に在つても、若は山谷曠野にても、是の中に皆な羅に塔を起て、供養すべし、所以は何ん、當に知るべし、是の處は即ち是れ道場なり、諸佛此に於て阿耨多羅三藐三菩提を得、諸佛此に於て法輪を轉じ、諸佛此に於て般涅槃したまふ。(繪圖法華經三九七頁)

法華經を説の如く修行する、それが何處であつても、そこに佛様がござるといふ考でやれば宜しいので、そこが佛の菩提を成就し給ふ靈地であり、そこが轉法輪の靈地であり、涅槃の靈地である。法華經のある

處、釋尊のお在でなされた處と考へて宜しいといふことも、釋迦の遺蹟を崇拜する觀念を取つて以て經典崇拜の觀念と結付けたのである。釋尊を敬慕するが故に遺蹟を崇拜し、遺蹟を崇拜する觀念はきまつて居るから、移して以て法華經を尊信せよと斯ういふことを説いたのである。

それから「神力品」の偈の所に
能く是の經を持たん者は則ち爲れ已に我を見、亦多寶佛及び諸の分身者を見、又我が今日教化せる諸の菩薩を見るなり。(繪圖法華經三九八頁)

この經を持てば直ぐ佛に會ふと同じことであるといふことを言はれた、これは理窟ではないのであつて、この法華經を信念するといふことは、その儘釋尊の實在を信念することであるから、法華經を見れば我に會ふことが出来るといふのである。法華經を信じて佛の實在が意識に映つて來ないといふやうな者は法華經を知らないのである、たゞ捧讀みにして居るからである。

それからたび／＼引證した「勸發品」に
若し是の法華經を受持し讀誦し正憶念し修習し書寫すること有らん者は、當に知るべし、是の人は則ち釋迦牟尼佛を見るなり、佛口より此の經典を聞くが如し、當に知るべし、是の人は、釋迦牟尼佛を供養するなり、當に知るべし、是の人は、佛善哉と讚めたまはん。(繪圖法華經四七〇頁)

これはモウお經と佛様とを連結して説明してある、法華經を信じ持つところの者は、則ちそれはお釋迦様に會ふことが出来る居るものである、さうして佛様の御口からこの經典を聞くが如きものである。この「釋迦牟尼佛を見奉り佛口よりこの經典を聞く」といふ、この見るといひこの聞くといふことが最も大

事な點である、曼陀羅の中央に南無妙法蓮華經と書いてあるのは、釋迦如來が肉身滅すと雖も、我が相
 を見たいと思へばこの法華經を留め置くに依つて、妙法の文字を拜した時、そこに我は實在せりといふこ
 とを信念せよ、肉身は見えぬけれども我の本懐を留める妙法蓮華經の文字は汝の肉眼を以て見ることが出
 来るから、妙法の文字を拜する時、そこに我が實在を憶念し來たり、妙法の音聲汝の耳に響く時、側に本
 佛在りましてこの教を與へ給ふと信じなければならぬ。だから法華經を受持し正憶念するところ、釋迦牟
 尼佛を見、釋迦の御口からこの經を聞くといふ、この釋尊を見るといふのが妙法蓮華經の五字である、五
 字といふ文字に現してある時は、これを釋迦牟尼佛を見るといふ「見佛」に代つて居るのである。それか
 ら一聲の南無妙法蓮華經と唱へるこの聲になつて居る時には、佛口よりこれを聞くのであつて、佛の御口
 よりこの經文を聞くといふ「聞法」といふことに考へたら宜いのである。釋尊の尊とき御聲からこの教を
 聞く、自分の聲で南無妙法蓮華經と唱へるのだけれども、それは此處に本佛がお居になつて尊とき教を
 與へられて居るのである。題目の聲耳に響く時、その一音の聲は本佛の御聲なりと憶念し、妙法五字を拜
 する時、その文字を通して本佛の實在を意識信念して行くのである。

隨つてこれを『守護國家論』に斯様に仰せられて居る、即ちこの勸發品の文を引いて、

此の文を見るに法華經は釋迦牟尼佛なり、法華經を信せざる人の前には釋迦牟尼佛入滅を取り、此經
 を信する者の前には滅後たりと雖も佛在世なり。(論遺二五八頁)

法華經を信じなければ釋迦牟尼佛は入滅をして、何處へお出でになつたかわからぬといふことになる、け
 れども法華經を信じて行けば、釋尊は入滅なさつたといつても、それは印度降誕の肉身の釋迦が方便で注

榮を現したのである、我が信する本佛は今も茲に實在し給ふといふことになるからして、今も佛在世であ
 る。又同じ御書の少し前のところに、

佛の入滅は既に二千餘年を経たり、然りと雖も法華經を信する者の許には、佛の音聲を留めて時々刻
 々念々に我が死せざる由を聞かしたまふなり。(論遺二四五頁)

佛の入滅よりは已に二千餘年を経居るけれども、佛を信する者の許には佛の音聲、即ち法華經音聲、
 經めれば南無妙法蓮華經の音聲を留めて、時々刻々に我れ本佛は死せざる由を聞かしたまふ。壽量品には
 本佛こゝに在ませりといふことを説いてある、それを纏め上げた南無妙法蓮華經の聲は、その聲自身が本
 佛こゝに在ませりといふことである、時々刻々に佛は側に居て我等を護つて下されるといふ御聲に題目が
 響いて來なければならぬのである。斯様に解釋することに於て、經典法身の思想に伴ふ誤謬を矯正するこ
 とが出来る。

さうして法華經の結經たる『觀普賢經』には一層その事が明かになつて居る。

此の經を持つ者は即ち佛身を持ち、即ち佛事を行するなり、當に知るべし是の人は、即ち是れ諸佛の
 所使なり、諸佛世尊の衣に覆はれ、諸佛如來の眞實の法子なり。(論遺法華經四八七頁)

大乘方等經を誦習するを以ての故に即ち夢の中に於て釋迦牟尼佛諸の大衆と普賢觀山に在りて法

華經を説き一實の義を演べたまふを見ん。(同上四九〇頁)

釋迦牟尼佛大乘經典に向ひたてまつて復是の言を説け。(同上四九四頁)

正遍知世尊、現じて我が證と爲りたまへ、方等經典は爲れ慈悲の主なり。(同上四九七頁)

諸佛世尊は常に世に住したまふ、我れ業障の故に方等を信ずと雖も佛を見たてまつること了ならず、今佛に歸依したてまつる、唯願くば釋迦牟尼佛、正遍知世尊、我が和上と爲りたまへ。(同上五一〇頁)

我れ今大乘經典甚深の妙義に依つて佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依すと。(同上五一二頁)

この文の一々の説明は省略するが、併し觀普賢經に移るまでもなく、只今の勸發品の文の如き、法華經を正憶念する時釋迦牟尼佛を見、佛の御口から御經を聞くといふことで、曼陀羅の中尊の題目がどれ程大きく書いてあつても、大きく書いてある程本佛の實在をハッキリ意識されて行くのである。大きく書いてあるのが邪魔になるといふことはない、又大きく書いてあるからそれがお釋迦様より偉いといふことはない、これを我が實在に代へて考へよといふので、こゝに形見に五字七字を書くのである。恰も天照大神様が鏡を皇室にお傳へになつて「この鏡を見ること我を見るが如くせよ」と仰せられた、その鏡と同じことである、鏡だけが有り難くなつて、天照大神様を忘れてしまへば、それは大間違といふものである。この我が傳へた鏡を見る時、我を見るが如き思ひなせよと言はれた。それと同じことに妙法の文字を拜する時、本佛の實在をアツ／＼と感激に移して行く所に日蓮教學の真意がある、さうして曼陀羅のお題目がどの位大きくお書きになつてあつても、それが本佛釋尊より偉いから大きくお書きになつたといふものではない。天照大神を祀る時の如きは姿も何も無い、たゞ鏡だけであるから天照大神を忘れるかといへばさうではない、鏡を見る時そこに天照大神在ませりと思ふ、鏡が大きく立派になればなる程益々天照大神が有り難く感せられるのである。

さういふ風に題目と釋尊の關係を解釋することがこれが法華經の經旨より来る正系であつて、日蓮教

學の正統歸結である、そこまで行かない學者の議論は皆な間違ひである、それは私が命に換へてもこゝに斷言をして置く。

この教義信條の整束に關することは、從來も部分的には屢々申述べたことであるけれども、順序立つて斯様に纏めてお話ししたことは初めてである。この教義信條の整束と題する講述はこれを先で一先づ完結としますが、どうかこれに依つて益研鑽を積んで日蓮教學の教義信條の結束を明瞭に意識信仰せられんことを切望する次第であります。

教義信條の整束 一名日蓮教學の精髓 (終)

大僧正本多日生師著

一切の勝利は人格にあり

—名古屋放送局の講演—

- 一部 金五錢 送料金貳錢
- 十部 金三十五錢 (送料共)
- 百部 金參圓 (送料共)

「第三十版發行」

名古屋市東區田代町城山

發行所

統一編輯局

振振名古屋一〇八一九番

信行の基調を説ける觀普賢經

(第五回)

入文解釋

井村日咸

一、序分

(經文)如是我聞、一時佛在毗舍離國

大林精舍重閣講堂 (續法四七六)

本講より經の本文に就てお察を致します、第一節より三までは序分で、其中に本節は通序である、佛説の各經を通じて、何れも經初に序説せられてある處であるが故に通序と云ふ、一般の通序としては「如是」所聞の法体「我聞」能聞の人、「一時」所説の時、「佛」能説の主、「住何々」所聞の所、「與大比丘衆等」開持の伴の六段に分かれて居るが、今經は最後の列座の人々を擧げて居らぬので、開持の伴の一段を缺

いて居る。

如是とは此より下説く所の今經の全体を指して言ふので、今經の結集者が吾々は是の如く説き給ふを聞けりと云ふたのである、我聞とは結集者たる聖者達で、道途の傳説に依ると小乗教は阿難尊者を上首として一千人の阿羅漢に依つて結集せられ、大乘教は文殊菩薩を上首として結集せられたと云ふが、大乘教共に阿難尊者等に依つて結集せられたと見るが穩當ではあるまいかと思ふ、一時とはあるときと云ふ意味である、明かに年月を示して無いのは遺憾であるが、經の中に示された所から推測して略其時節を計算し得る譯であつて、今經は次下に却後三月我當般涅槃の言葉があるからして、今經は佛涅槃の三

月前に説かれ、而して經の内容より見て法華經の普賢勸發品に引續いての所説であると推測し得る次第である。佛とは釋迦牟尼佛で、一切經は總て釋迦牟尼佛金口の所説に外ならぬ、釋尊以外に佛敎ありと言ふは涅槃が誤解かに過ぎぬのである、在毗舍離國大林精舍重閣講堂とは今經を説かれた場所である、毗舍離國の事で摩揭陀國の東北に當る國である、佛般泥恒經に依つて見ると、佛は摩揭陀國王舎城(法華經を説)より波吒利弗多城(摩揭陀)の新都)に赴き、夫より漸次東行吠舍離城附近の竹芳聚に至る、當時此地飢饉の爲に穀價騰貴し食を得ること難き爲め、諸弟子をして豐饒の地に赴かしめ佛は唯阿難尊者と共に竹芳聚に止る、佛は此に於て病を得給ふ、既にして佛吠舍離の大林精舍重閣講堂に入り給ふて衆僧を此に會し告るに佛滅後の用意を以てし重ねて「今より後三月にして當に般涅槃すべし、佛去らば經戒を持すべし」と宣言し給ふた、此より佛は吠舍離を

出でて北方に進み、波旬國に於て薄陀の供養を受け、鳩尸那羯羅に向ふ、途無連河(譯して波提河)に至り佛自ら衣を解き深浴し終りて河側娑羅林に入りて告げて曰く、我今夜半般涅槃すべしと乃ち北首面西右脇にして双樹の下に臥し最後の教誡をなし給ふたとある、此に依つて見ると、此經は佛既に病を得給ふて大林精舍に入られたる時に説き給ふた御經文である、大林精舍とは吠舍離城にあつたお寺の名と心得てよい、精舍とは梵語の僧伽藍と同じである、現今寺と言ふのは支那では素お役所の事である寺とか院とか云ふ字のつくお役所であつて、今の外務省の様な對外事務を執つた役所を演説寺と云ふた、後漢の明帝の時其役所へ天竺から加葉摩騰竺法蘭の二人が白馬に佛像と經卷とを乗せて來た、夫れで白馬寺と言ふを建て、其處に居住せしめた、夫より後僧侶の住居に寺と云ふ字を附けるに至つた、現今は寺の字のつくお役所は無いが、大審院とか控訴院とか云ふ院の

字のつくお役所は澤山ある、お寺にも院の字のついたのが澤山ある、大林精舎も大林寺と云ふたのが分りがよいかもしれぬ、重閣講堂とは講堂が二重になつて居るからで、二階屋の様になつて居つたのである、化城品にある重門高樓閣の事で、繪に書いた龍宮城の門の様な形の建物であらうと思はれる、智證大師は「記」に天台の釋義に倣ふて法門、觀心等に約して釋せられて居るが、我々の信仰には直接の關係なきこと多ければ略して置きます。

一、佛涅槃を告ぐ

告諸比丘、却後三月我當般涅槃

(四七六、三)

佛病を得給ふて、再び起たざるを知らしめて、斯く宣言せられたのである、佛般泥洹經には「我年八十なほ故車の如し、身體また堅強なし、我般涅槃の後は經戒を棄ることを得る勿れ」とある、疑あらば質し

置けよとの宣言である、此宣言に應じて質問を提出したのが次の一段である。

三 大士疑問を發す

如來滅後云何衆生起菩薩心修行大乘方等經典正念思惟一實境界云何不失去無上菩提之心云何復當不斷煩惱不離五欲得淨諸根滅除諸罪父母所生清淨常眼不斷五欲而能得見障外事

(四七五、七—四七六、二)

前節と本節とが別序である、此經の正宗を説き起す發端となるべき問題を提供したのである、此問題を提供したのは阿難尊者と加葉尊者と彌勒菩薩との三大士である、此質問は二つに分れて居る、一は出世間に就いて問ふたので、菩薩の心を起し大乘經典を修行し一實の境界を思惟し無上菩提の心を失は

ざるには如何なるべきやと問ふたのはそれである、第二には世間の因を問ふたので、煩惱を斷せず五欲を離れずして六根清淨を得るには如何になるべきやと問ふたのである、第一問は題號にて言へば觀音實であり、第二問は行法に當るのである、本文に入つても此二大段は自ら分別せられて居るのである。

第一問は我々が信仰の對象として如何に一實の境界を思惟すべきやとは我等が本尊に對する信仰意識に就て疑問を發したのである、一實の境界とは一實の妙理を證得したる佛陀の境界で、佛陀の境界を如何に思惟せば我等の信仰は正當なるやと云ふ疑問である、其一實の境界を思惟するには菩薩の心を起し(發心)大乘經典を修行する(修行)ことが前提であり、我等の發心修行に依つて佛果を成就し得るのであるが故に、我等の信仰の發生に就て質問を發したのである、第二には我等が信仰の効果に就て問ふた。六根清淨を得ることを以て其効果とするが、

其六根清淨は煩惱を斷じ五欲を離れて求むるのではない、我等衆生の本質を迷悟不二凡聖一如の體と根本的に定めて置いて、其上に佛性の發現を見んとするのである、此は實大乘圓教の教理である、小乗教が煩惱を斷盡して而も後に六根清淨を得んとするに對して相即圓融の妙理を顯したものである、此大乘の教理たる相即圓融の法門は我等が如き罪業深重のものに速疾頓成易行の途を開拓して一大光明を與へ給ふたのであるが、過ぎたるは及ばざるが如しとやらで、却つて増上慢の輩を生ぜしむるの虞がある、そこで如來は末法濁惡の世に於ける増上慢の徒輩を警め給はんと思召して茲に六根體悔の必要を宣示せんとせられた、此れが爲に三大士の質疑は發せられたものと思ふのである、現在大乘佛敎の通弊と本經の所説とを對比せば、如來の深慮に大なる敬意を表せねばなるまいと思ふ、現今の佛敎界が徒らに教力の大なるに偏倚して自己の修養を輕視するの弊

あるに對して正しく頂門の一針と言ふべきである、特に法華經の流通分として末法に法華經を行ずるも

の、規範を示されたに對して現在の法華經宗徒は大なる考慮を拂はねばならぬこと、信ずる。

大僧正 本多日生師著 本尊論

目次

- 一、緒言
- 二、宗教と本尊
- 三、諸種の本尊觀
- 四、本尊と真理
- 五、本尊と倫理
- 六、本尊と救済
- 七、佛教の本尊觀
- 八、佛教の三寶觀
- 九、佛身の要旨
- 一〇、滅後信仰の概觀
- 一一、佛教本尊の三方面の考案
- 一二、法華經に顯はれたる本尊
- 一三、遺文に顯はれたる本尊
- 一四、本尊の勸請文
- 一五、本尊勸請の實例
- 一六、遺文の會通
- 一七、異論の解決
- 一八、結論

定價 布裝一部 金七十錢 送料金四錢

(紙裝は賣切れ)

發行所 賣捌所

立正結社 名古屋市東區田代町常樂寺内

編輯局 振替名古屋一〇八一九番



虎ちやん

中村にしき

皆さん、新年お目出とう御座います、本年はここに、鳥孫殿下御誕生の第一年を迎へ奉りまして、今此所に、皆さんと共に重ねて、お目出とうを申上ります。

皆さんは、虎ちやんと云ふ子供を、御存じですか。

知りません。そうでしょう、虎ちやんを、知つて居るのは、私し獨りかも知れませんが、それでは、是から、虎ちやんのお話をしますからお聞きなさい。

虎ちやんは、虎太郎と云ふ名前の子供で、ある海岸に近い、牛舎、牛廄で、暮しを立て

居る賢いお家に生れた子供です。

賢いお家ではありましたが、お父さんやお母さんが、年を老つてから生れたのと、それは、活潑な、利功な、運動好きな子供です。眼にも入りたい、喰べもしたいと云ふ程な、可愛がり方です。

それに、學校から飯つて来ますと、お僕もする、お手傳もして、其の暇が少しでもあれば、ボールや、マラソンやいろ／＼の運動をして遊びます、それで學科の方はと云ふと通信簿を見ますと、全甲と云ふ成績でありま

すから、お父さんお母さんのお喜びは、本人の虎ちやんよりさ／＼嬉しそうです。

す、虎ちやんは、近頃どうしたんでしよう、御飯より好きなと云ふ運動の方は、忘れた様に見向もしないで、御用事や、御手傳の相聞には、お家から近い海岸に立つて、打よする大浪の彼方を、何を見るときもなく、腕を組んで、眺めて居ます、其の姿は、毎日／＼と續いて誰れ知らぬ者もない様になりました。

二

あらい風が顔りに吹て、岸に打ち寄せる大浪も、時には其の勢を、そがれるかと思ふ。年の瀬も、なしたつた日、漁師町の家々では来る春を迎へる爲に、各處からも此處からも、煮す米の香も高く、揚く餅のきれの音逆か響く荒浪の音に和して聞ゆる、夕暮れの日です。

虎ちやんは、何事かを考へ出たのでしよう、につこり笑ひて、生き返つた様打勇しい姿をしてお家へ飯つて行きました。

一夜明れば元日と云ふ、大晦日の日です

お家では、質いながら、日出度初春を迎へると云ふので、お松も建てました、お借や、のし餅、それ／＼に盛りまして、一家三人打ち双らうて、はれやかな、楽しい夕げの膳につきました。

その、つもの夜の夜、十時と云ふに、初春を迎へようと繕い床につきました。

虎ちやんは、製達の安き順りに就たと見るや、サバと寝床を跳ね起きました、そうして製達に知れぬ様に、ソツとお臺所に行きまして、柿竹に掛けてある風呂敷をはずし、かたへの新ざるに入れて有るお餅を、取つては入れ、負へるだけ包める丈入れまして、確かり貰いました、そうして裏の戸を、音のない様に明けて、外へ出まして、海岸の入江の方に参りました。

虎ちやんは、この入江に、つないである、船主が新造しましたが、船足が面白くないと云ふので、捨られてあります、新しい漁船に飛び乗つて、負つて来た、お餅をその船底に

隠ひ、また船を出て、つないである、船の網を切り去りました、そうして、船に登つて、大きな帆柱は建たれないので、浜への小さな帆柱を立て、帆を上げました。

日暮れから、いつ風とも知れず吹きすさむ西風は、帆を一杯にはらませて、さしも大きな漁船も、する／＼と岸を離れて、はや船は怒涛がまく大海原へ翻るさ出て、真直らに東に向つて、矢の様に走り進むのです。

虎ちやんは、船子を、指揮する沖合船頭の坐席に、ドツカと坐りまして、
「ア、是れで好し、ほんとに嬉しい、お父さんやお母さんは、心配をして居るかも知らないが、今にきつと喜ばせる、此の船で、いへ／＼と進んで行たら、あの、龍宮城へ行けるに、違ない、もしか間違つても、学校の先生のお話のように亞米利加へ行くだらう、ア、嬉しい、お腹が減れば、お餅が澤山ある船を進め、風よ止すに吹け、イ、氣持だ、こんな楽しい事はない」と喜んでそのうれしき

に、心を跳ねて居ます。
船は頼りに帆柱も折れる計りに、西風を受けて、東へ／＼と突き進んで居ます。

三

お家では、お母さんが、フツ眼を腫して、虎ちやんの寝床を見ますと、菰抜けの袋です小用にでも行つたかしらと、待つていましたがいづれ進んでも眠つて来ませんので、真く眠て居る、お父さんを呼び起しまして、虎ちやんが見へないと云いました。

お父さんは、起された始めは、小用に行たと思つて、別に心配もしませんでしたが、幾ら待つても寝床へ飯りませんので、ハテナと、心から心配し始めまして、もう夜明にも近かろうと、午前四時だと云ふに、飛び起きました、虎ちやん／＼と、呼び立てましたが、返事をする者は、コケコッコッ／＼と初錨の聲のみです。

エイ面白くないと思ひましたが怒られもしきつて、船は矢を射るより早く、突き進むのです。

しません。

彼所か此所かと、廣くもないお家を探しますと、お臺所の、のし餅は大釜と減つ居ます、ハテナ、變な事もある者だ、泥棒ならみんな持て行そな者だ、それに足跡も見へない、外にも髪りはない、サテは、虎が持出したかしら、大晦日に、のし餅持つてどこへ行つた。

虎ちやんの、お父さんお母さんは、日出度い寅の新しい年を迎へたと云ふのに、たつた獨りの虎ちやんが、見へないので、おと森もおぞ／＼にも、そツちのけで、元日の朝まだ暗いのに、年始の言葉も忘れて、近所や、お隣やら、親戚縁者と、手の届かざり尋ねましたけれども、来ません、御心配なことですれ、の外、さらに良い手がかりがありません。

其の内に、海岸の方では、また／＼大騒ぎが持ち上りました。
吹く風の音や、打響せる大浪の音に、くち

口に、言ひ交わす言葉は、解りませんが、その内に、聞き取りましたのは、船主且那の、あの新造船が、船の網を切られて、影も形もないと云ふ、さむきなのです。

それから、續で、船を降つたのは、人間の仕業だと云ふ事を聞きました、お父さんは、コレデは、虎め何か考へ違をしたに相違ない、アノのし餅を持って、アノ船に乗て、何所かへ行たに違ひない、困つた事が出来たと、お父さんやお母さんが、事か解つて来れば、来る程、その心配は増して来まして、坐つても起つても居られん程でした。

四

虎ちやんは、大海原の荒海を乗り切り、船は東へ／＼と進の喜び、沖合の坐席に、あぐらを組んで、東の大空を眺めて居ます。

先天に輝く星の光り、まづ黒星のような、星の輝は、いつとなく薄いで来て、はや東雲の頃となつて来ましたが、風はますます吹き

しきつて、船は矢を射るより早く、突き進むのです。

ア、なんと云ふ嬉しいかと思ふ間に、大正十五年の初錨は、進かまく荒海を顧て、堂々全世界を廻して登りくるではありませんか、見渡す限り島もなく、大濤さわく海の中に、只々獨り新造の船に、それも船頭の坐席にすわつて、この初錨の光りを満身に浴びた、その爽快さ、美しさ、喜しさ。

虎ちやんは、只々／＼歡喜に充ち／＼大濤の雨が、兩方の眼から、ホッ／＼と落ちて来る計りでありました。

虎ちやんは、海岸の村に生れたのですから来る年毎に、海の後方、荒海を顧て、さし登る初錨は、お父さんや、お母さんと、いつしよに眺めたのですが、コッナ、美しい、嬉しい、初錨を眺めたのを無上に喜びまして、おぞ／＼煮の音りに、船底から、持つて来た、のし餅を取出して、初錨を身にうけつ、噴へ始めました。

大陽が帆柱の真上にあると思ふ頃です、どうした事か、矢のよう彈丸のように進んで来た船尾は、バネリと止まり、さしもに吹きに吹いた風は、船の毛も、ゆるかぬと云ふ様になりました。

虎ちやんは、大それた驚きまして、是れはいかん、此の大海原の真只中に、船が動かぬとなつては大問題だ、さあどうしよう、困つた、の百鬼返し、操り返したのですが風の子も吹ては参りません、風は四日や、五日で風とは思つて居なかつたのですが、此の海の真只中で、風に見はなされては、もうだめだ、ア、困つた、私の命は助からないと悲しい顔をして居ますと、ズドンと右舷の方で、すさまじい音をたて、突き當つた様です。

フト見ますと、血だらけの船のような物が船の横腹を、突き破つて、その切先は、倒してある、帆柱に、さつて居るではありませんか、さうして其の船を救かうと云ふのでし

よう、切り、ばたんとするので、船の動搖は容易な者ではありません。

虎ちやんは、這ひながら、漸く船先に近づいて、よく見ますと、どうでしょう、それは二丈もあろうと云ふ、カサキ船なのです、海の玉と云はれる、大船でも、此のカサキに船先を端へて襲撃されては、あの大きな船も御免と云つて逃げ出すと云ふ、恐ろしい、その長船で、船と間違たのでしよう、船を突きさしたので、切先は、大い帆柱へさつて、取れませんが、切りに、ばたんとするので。

虎ちやんは、其の船先を切り捨て、船のゆるぎや、海水の侵入のを防ごうとします内に同じ右舷に、また、血船が、すさまじく突出れて、もうすこしで、船のあたりを刺される處でしたが、ドシンの音と、船のゆるぐのと、イナト云ふ程、尻餅をつきましたので船には刺れません。

今度は、左舷の方の同じ處に、二疋のカサキ船が、船の横腹を、突き破つて、切先を帆柱へ刺し込みました。

四疋の大カサキ船が、てうどカートの權の様に、突きさつて、ばたんと揺る者ですが、海水はやたらに入り、其の船の動き方は今にも沈むかと思ふ程です。

風が風で、困つて居たのに、またこの災難らしいフカが、一疋浮いて来たと思ふ間に、幾千と云ふ、フカの一群が、先を争ふて浮て来るではありませんか。

船にあたる強ひ風に、かつと眼を開いて見つめると、どうでしょう、船は東へ、急速力で進んで居ます。

ハテナと、船の外側を見ますと、幾千と云ふフカは、船に突きさつて居る、カサキ船を吹ようとして、私しが先きに吹べるんだ、いや私が先だと、争そいですが、数知れぬ、フカは、一口吹たか、吹ない内に、アッショイ、後から、推し出す者ですから、いつの間に船は、其の推す力の方で、だん／＼速力も加わつて来まして、風もないのに、船は丁度矢のように走り出したのです、虎ちやんは、船が少し東北にそれた様ですから、帆を取り直そうとするのですが、船が、後から／＼と攻め推すので思ふ様には参りません。

その内に、遙か向ふを見ますと、海の真ん中に炎天を焦がす、火船の柱が立ち登つて居るのを見出しました。

虎ちやんの驚きは、非常な者でした。『ヤア、何んだらう、火の柱に違ひない、ま

てよ、海の水が燃ゆる者はない、けれども、どう見ても火船だ、火の柱だ、矢の様に走る此の船、あの火船の中に乗込んで、とても助かる見込みはない、困つたなアと歎きま

したが、氣付ますと、船は、どうした事か、矢の様に進みません。其れ斗りてなく、あの幾千と云ふ船の群れは、一疋も見當りません、『チヤ、／＼船はどうしたのだらう、火船を見て驚いて逃出したのかな』と行く手を見ますとどうでしょう、それは、火船でも、海水の燃ゆるのでもありません、四日を受けた、赤珊瑚が、日の光りに反射して、火の柱に見へたのです。

虎ちやんが、ドキ／＼して居る胸を、なぜ下した時には、船はゆる／＼此の離れも見た事もない、美しい珊瑚の島の入江へする／＼と這り込むのでした。

虎ちやんの、其の喜びは、どんなであつたでしょう。虎ちやんは、島の、とある岩角に船を結び

つけて、珊瑚島へ飛び上りました。さうして、あの美しい奇麗な、珊瑚の林へ分入りまして、珊瑚の根で、心行ばかり見入りました、さうして、此の珊瑚のお土産を持って、お家へ報へつたら、さぞ／＼お父さんやお母さん始め、村の人達も、驚いたり、喜んでたりするでしょう。

チ、さうだと、落ちて居た、大きな岩の塊を取り上げて、交へるが如き喜びの力を出してあの、美しい珊瑚の根元に打ちつけました。

『ドン、ガラ／＼』
『ドン、ガラ／＼』
美しい、眼にもまばゆき、珊瑚の枝は、忽ち山の様に、足踏も出来ぬ程、折り取りました。

虎ちやんは、浪打際に、打寄せる、若布を結び、珊瑚の、そだを這りました。
『ヨイコラー／＼』
一把握二把握、十把握二十把握と、船に積み込みま

した、そうして、此の島は、どんなに廣いのだらうと、折取つた跡の小高い處に登つて見ますと、どうしてしやう、すぐ其の山麓に白珊瑚の林が、立ち並んで居たのでした。次手だ、是れ少し持つて行かうと、前の様に岩の塊を投げました。

「ドン、カラ〜」
「ドン、カラ〜」
また、此の白珊瑚も、若布で、把に、いわへまして、

「ヨイシヨ、コラ〜」
と船に積込みました、船の中は、赤や白の珊瑚の枝で、坐る處もない程です。

「マア、是れでよし」
「マア〜」
マア〜と、船でゆつくり休みましたよとすると、西風風が、そよ〜吹くではありませんが、なんと云ふ、仕合せな風だらう此の屋では休んで居られぬと、岩角の綱を解きますと、船は定風を受けて、ゆる〜島を離れました。

「ア、嬉しい〜」
と小松をして居る間に、風はだん〜加わつて来まして、船は、西〜と矢の様に走るのです。

五

二日の朝、まだほの暗い海岸には、お父さんお母さんを始め、近所や隣の叔父さんお婆さんは、昨日一日お尋ねあぐみましたが、今日もまた、細み難さを頼みにして、東雲の頃から、海岸に集りまして、もしや船が、成ちやんが、流れ付くかと、海の方を一心に眺めて居ました。

すると、浪の音が沖合に、船ともつかぬ一羽の黒い者を見出しました、鯨がしら、船がしら、集まつてる人達は、いろ〜と語り合つています内に、船に小さな帆を上げて、真しくらに、此方の岸邊に向つて、矢の様に走つて来るではありませんか、鯨の脚は、だん〜に打撈われ、小手をかざしてよく〜

四〇

見ますと、それは、船主目撃の新造船です成ちやんの船だ、確に巨額の船だと、口ぐちに叫んで、

「チ、イ成ちやん〜」
と聲を限り、呼びました。

船は、矢のよう弾丸のように荒波を乗り切り、浪を乗り越へ、其の餘勢で、白珊瑚の山と積んだ、その荷の中に、佛のよう眼をつむり、きちんとして坐つて居ます。

船を取りまく、お父さんお母さん始め、集つた人達は、その喜びと、目度さを、ちやんぼんにして、
「成ちやん〜」
と呼ばれるものですから、成ちやんは眼を閉いて見ますと、このうれしい喜んで名を呼ぶのを聞きまして、夢ではないかと思つたので

(四五頁へ続く)

罷 睡 録 (其十二)

黄 薇 菴 青 村

二五、俄か出家
上泉伊勢守と云へば、神流の關組として世に名高い人である。彼が若い時の事だ武術修行の爲め諸國を廻りあるいて居ると、伊賀の名張の在所へ出た。見ると大勢の人々が民家を取捲て騒いで居るから、什麼いふ譯で其様に騒ぎなると謂て見ると、其答へが斯うである。

今人殺しをした奴がある、捕へて役人に突き出さうと致しますと、其罪人は酷い奴で、矢庭に村の子供をさらつて此家の物置の中に飛び込み、俺を縛るなら縛るがよい、俺は縛らるゝ前に屹度此子供を殺してやると、マア斯様に申します。

では其子供が賊の爲めに人質に取られたの

ぢやな、左様で御座ります。して其賊が此物置に立籠つたのは何時からぢや、昨夜からの事だ御座ります。ワンソウか、それでは其子供供助けて取らずで、難有う御座ります、何卒宜敷お願ひ申しますと、云はれて伊勢守、零時思案して居ると、折しも通りかゝつた出家があるのは是れ幸ひと手招きし。

斯く〜の次第で村人が當惑の體である、捕者其人質を取返してやらうと思ふ、就ては失禮ながら暫らく貴僧の其法衣を買しては下さるまいか。人を助くるは僧侶の職分よろしふ御座ると、其法衣を脱いで伊勢守に渡すと、イナかたじけなう御座る、逆もの大手に捕者の髪を剃ては呉れまいかと、怒り俄か出家になりすまし、僧着の法衣を脱び、探飯を懐中に入れて静かに物置の中へ進入して行

た。

賊は伊勢守を見て之を告めた、誰だ何用あつて来た、一歩たりとも我傍に近くが最後、此子供は生命は無いぞと、又小供の胸に於てた。其時伊勢守は物柔かに、捕者事はお見やる通りの身の上ぢや、人を救ふは出家の務め、其小供定めし腹が減つたであらうと探飯を持って参つた、暫らく其手を握めて之を喰はせて下さいと、探飯を投げてやり、小供が手を出して喰ふのを見て、さも喜ばしさに「美味いか〜遠慮なく喰べて仕舞やれ」と云ひ乍ら、又探飯を一つ出し、サア其處の人も一つ喰べやれ、腹が減つては軍に出來の世の習ひぢや、人を救ふは出家の務めと投げてやる。賊も暫く安心した體でそろ〜手を出して、其探飯を取らうとする所を飛び込んで行く伊勢守、賊の手を取って引き倒し其小供を奪ひ回して了つた早業は電光石火の目にも止らず。

サア人質は取戻したぞ、賊の威威に村の者

心の儘にしたがよい、と云はれて村民は先
を争ふて亂入し、到頭罪人を捕めしつたの
で、伊勢守は法衣を脱いで之を出家に返すと
御身は誠に剣刃上の一匂を悟り得た人ぢや
と、感激指かず袈裟を與へて立去つたので、
毛の生るまで経句、これが氣樂と、御田家
の伊勢守再び退隱の道場の上つた。

人を教ふには智慧が必要、如何に慈悲が溢
れても、手段を選ばず進二無二たに助けてと
焦心たのみでは、その容易に目的を達するこ
とは出来ぬもの、人間萬事日常の事實に
たぐまぬは、此智慧を佛門にては善巧
薄山其例は、此智慧を佛門にては善巧
方便と云ひ權智の活用とた、へる、權智方便
も行いては如實智と合体する、もし如實智と
一知しない場合、それは純度混合があると
知らればならぬ。そんな智慧は益のないのみ
ならず、偶々まで害毒、流すこと夥しい、
注意すべき事である。

怨 嬉 迷 悟

世 間

とかく、この世間さま程うるさきはない。
よきにつれ、あしきにつれ、世間さまの眼、
あるは○びそめき、さんざめくことの煩はし
き極みにこそ。

なげにや、如何せばこそ、斯くは煩はしき
ものによ、泰山鳴動すとも、われ聞せず焉
の情りある者さて置き、風馬牛の大氣を抱
く者さて置き、わが如く凡夫凡庸のもの、こ
の世間さまに奔弄さるゝこと甚だしき。

あれもしたし、これもしたし、されど世間
の眼こそうるさけれ。世間が○こわすらわ
しけれとて、眞さんことの二三だに爲し得ざ
るも怨みなり。
さればとて、この世間あればとて救はるゝ

線を突破する度胸と共に、この瀟灑たる權智
の差配が必要で、目的の爲には手段を選ばず
テな事を云つて居る我武者があるから、世の
中は兎角物騒千鳥になるので、心すべき事
はある。上皇伊勢守の權智、何等かの参考に
もなるであらう。

二六、五圓のマツチ

横山大觀畫伯が、大正十年秋院展
開會 權の監視をして居る時、煙草を吸
はうとして煙寸を摺つたが、思ふ様に發火し
ないので、待て居た大工の煙寸を借りた所が
非常に氣持よく發火したのみならず、其煙寸
の商標が氣に入つた。それは加藤清正が虎狩
をして居る畫で、如何なる所が氣に入つたか
分らないが、居合せた同人連にも示して大
喜び、早速五圓紙幣を出して此煙寸をこれ
だけ買とる機事務員の名取某に頼む、頼まれ
た同君三日間東京市中を駆け回り廻りて、
やつと買集めた煙寸を大觀先生の宅へ持

古 田 昂 生

こともあり、世間に醒くれ、世間をくゞり、
て、わが思ふこと馬々として爲し終るゝこ
と無しとせずや。

世間無くしてわれ在らず、われ又世間を爲
すの一分子。親は子を爲して三界に苦しみ、
子は親を頂いて反哺に懐懐する理と、世間と
われの理とは、共に一にあらすや。

立 志

A 子「あの人、どうして、あんなに偉くな
つたの？」

B 雄「うまく社會を察して通したからサ」

A 子「まあそんな云ひ方失禮ぢやなくて

B 雄「いや社交術が長けてゐたとしても云

参すると、マア煙寸をこんなに薄山どう遊ば
すのと驚く夫人の鼻のさきで、なんと氣持の
よい煙寸でないかと「マァ」と摺つて見せ
た。

買ふも買ふたり五圓のマツチ、その無邪氣
チ可波、眞ぞ可愛い、坊ちゃん氣質、世事に
疎いも此處まで來ると愛、敬がある。往昔の
高僧碩徳には此典型の人がよく有たものだ
が、近頃は世智辨僧のみ多く、その浮世離
れのした和尚は見當らない、却て知識の
藝術家に、チヨイ、此種の人を見出す、
面白いではないか。



ひませうがね」

A 子「あの方は、若くして賢王と取ひ、克
苦忍従して、今日を作つたのぢやなくつて？」

B 雄「さうとも物の本に書いてありますか
ねエー」

A 子「あなた皮肉な人ね」

B 雄「皮肉でせうか」

A 子「さうぢやなくて、つまり、あの方は
立志傳中の人物だわ」

B 雄「そんなによく知つてゐたら、始めか
ら聞かない方がいゝぢやありませんか」

A 子「オヤ、はばかりさま、だつて感心だ
わ、あの方は」

B 雄「あなたやうなお美しい方に賞めら
れるなら、僕も一つ、志を立てて、見ませ
うかねエ」

A 子「あなたに出來て？」

B 雄「これは無沙汰。つまり、月給の余り
を貯めて、社務に専ら、人には従、願に、
愛と善との生活に一生涯懸命になればいゝ、

んでせう」

A子「さうだわ、あなた、これからさうし
たらいとせう」

B雄「有難う。だが、止めて置きますわ」

A子「なぜ？」

B雄「だつて、あそこを通る葬式の花もち
おやられ、あれやもと殺傷書の書証だつたん
ですよ、そして、僕が今云つたやうに愛と
善の生活に身を賭して、最後に慈まれた
のが、あの花もちなんです。僕は未だ、花も
ちでゴツクリ佛にならうとは思ひませんから
ね」

A子「まあ！あつれた、あなたと云ふ人は

B雄「あされる方には、僕の役ですよ！」

臭味

川魚の泥臭き、海魚の潮臭き、運賃のゴツ
臭き、坊主の抹香臭き、道學者の論語臭
き、アンモニヤの尿臭き、耳聾くしのバネ臭
き、

高してやる。そしてその後ろ姿に浴びせる自
分の歌は

何の某に錢かして それ見たか
といふ 前途の民謡だ一寸痛快な氣
がする。いらぬ金のある人はやつて見るがい
ゝ、この馬鹿にした歌が、案外馬鹿になら
ぬから。

(四十五頁より續く)

すが、なつかしいお父さんお母さん始め近所
の叔父、お婆さんが眼の前に居るものですか
ら、こゝら夢ではないと、限りなき歡喜の涙
を、ハラ／＼と、船を流す程に、こぼしまし
た。

虎ちゃんば、船が沈む程、破て来ました、
赤や白の珊瑚を、そこに集つて来た人には誰
れにも後れにも、分けてやりました、さうし
て餘りの大部分は、買替ひましたら、それは
／＼大それたお金になつたので、そのお金
で、お父さんやお母さんを安樂にさしたと云
ふ事です。(大正十五年一月三日初會試演)

きなど、一物一臭は男女兩性の如く、不
離不拔のものゝ如し。

されどこの臭味ほど體忌の氣を生ぜしむる
ものは無し。臭味から驅脱せる人より受ける
清々しき感じはこまなく嫌しきものなり。試
みに諸君、その周圍を見廻し、この臭味驅脱
者の影を見給へ。而して有臭、無臭、兩者
よりの感受を鑑賞せば有臭、無臭の清濁
忽然として判然するべし。然し乍ら官覺
頗る鈍なる人はこの用なし。尤も鼻のき
一方に非らざることは申すまでも非らざる也
阿々。

借金

何の某に錢かして それ見たか
借山に種まいて
今年とれば来年に
来年とればさらひ年
と云ふ民謡がある。僕は時々この歌を唄ふ。
自分には字義通り悪友が少くない。これも因

四四

果と斷念であるが、悪友に限つて、三言目に
は「金を貸せ」といふ。で、自分にさしつか
えぬ限り、自分は貸してやる。さしつかえれ
ば貸さぬ。

Aといふ男が「金を貸せ」といふ

「理由は」と僕が聞く。

「友だちが逃々訪ねて来て御馳走してや
りたいが金が無いからだ」といふ。

借金までして、御馳走して、その過來の
友は果して心から嬉ぶだらうか。

Bが「金を貸せ」といふ

「理由は」と僕が聞く。

「余り洋服が見すばらしいから春着をつく
りたいからだ」といふ。

借金までして、服をつくり、それを身に
けて着飾つて果して心から嬉ぶだらうか。

自分はこのAやBに金を貸した處で返へ
すことは、どうも確信がない。だが「貸せ」
といふ、自分に差し支へない限り貸してやる
貸してやるといふより、やるといふ氣で金を

意氣

京都青年會員 有田健一

青年といへば意氣の全身に満ち／＼た人間を聯想する。實に
意氣は青年の専有物の如き觀がある。古武士には古武士の意氣
があり、江戸の町奴には町奴の意氣がある。然るに現在の青年
はどうか。怠惰なものが彼等の大部分を占め、鬱勃たる、天を
衝くが如き意氣は何處に見えるか。「我には一中スピリットあ
り」とか、「意氣を以て戦へ」とか云ふが、彼等の何處にそれが
あるか。流石明治維新には意氣の塊が多く居た。日本の國家は
我が双肩にありと自信して居た人物が澤山あつたのだ、其處に
於て始めて彼の大業が完成されたのである。青年の意氣！夫
れは彼の器には從ひながらも巖を通す潜勢力をもつた水よりも
數段のつよさをもつものである。其強さを持つ意氣を我々は漸
く失はうとして居るのだ。失つてはならぬ、否振興せねばなら
ぬ。スポーツもよからう、劍道柔道それもよからう。青年よ奮
起せよ、意氣は汝等の魂である。

記事

京都布教通信 一月八日塔中於成就院慶
 正婦人會初會「人間性と信仰について」有田
 宏道師△十三日午後本山園光婦人會に「は初
 會開催例年の通りぞんざい福引等の餘興に冬
 の半日を楽しく送る」信仰の托住」原田日勇
 師△十五日夜小川通竹屋町林玉嶺氏宅に於て
 家庭講演「正しき教に親しめ」王持真達師、お
 多福面」原田日勇師△十六日法光院に於て妙
 光婦人會初會「十功德品に就て」豊田通泰師
 「行菩薩道」金光孝碩師△十六日夜於本山青
 年宗教研究会開催「宗教研究に就て」王持真達
 師「現代の信仰状態に就て」金光孝碩師△十
 八日夜本山に於て例會本年度初會開催「何を
 手釋學に學ぶべきや」原田日勇師「人格完成
 の要道」有田宏道師△十九日大慈院に於て法
 王婦人會初會「信者としての心得について」
 王持真達師「笑ふ門に福」原田日勇師
 一月八日本正寺二樂會「御製を拜して」金光
 孝碩。「新年の所感」萩原日道△十一日本正寺

婦人會「挨拶」金光孝碩「我國將來の婦人」能
 仁寧一僧正。餘興として日蓮上人龍の口薩摩
 琵琶坂本玉峰先生琴六段磯貝正子秋田悦十先
 生千鳥小林俊子秋田悦子先生會員各自の餘興
 數番福引等ありて大盛會なり。
大阪教報 一月八日蓮成寺にて立正結社新
 年會を催し講演並に會員の五合演説△立正
 結社將來の發展に就ての意見等交々出て夜の
 更くるを知らず法悦歡喜の裡に散開せり。△
 十二日堂園寺初講人生の運命京藤布教師△十
 五日學生鐵佛會「現代思想に就て」伴氏「如
 來の大慈悲」京藤師▽二十一日蓮成寺にて談
 話會△二十二日學生鐵佛會堂園寺にて「法華
 經講義」中川文學士△同日立正結社講演「日
 蓮聖人を慕ひて」中川日史師△二十四日蓮成
 寺にて婦人會「婦人の力」上田師△同日平山
 宅に「法華經大觀」京藤師。何れも頗る盛
 會多大の効果を奏せり。
北陸通信 十二月廿四日本郡村岡本工場

「人格の修養」見玉日見△同日兵庫村森瀬工場
 外一、講師講演同上△廿一日四長田村、同△
 中庄、同△針原、同上△廿二日三國町公會堂、
 二百名、同上△同新保村山口工場外二職工百
 五十名、同上△廿三日金津町内田工場外二百
 五十名、同上△一月廿三日春日村江留上西敷
 工場百五十名「孝順」△同日午後三時圓利工
 場百二十名、同上△廿四日圓五工場百名、同
 上△島崎工場二百名、同上△島五工場百名△
 廿五日境村島田工場五十名、同上△中川工場
 百五十名、同上江留上西敷工場三百名同上、
 四庄第二工場七十名同上、春江會社百名同上
 以上
高岡信行學會新年講演會 一月十六
 日午後一時より市内妙國寺に於て 新年講演會
 を催す、島山友次郎氏の「佛教信仰の歸途」
 と題し、本多日生現下の御論説を主説し、更
 に具塚本勇師は「十信十行」と題し、信行の
 意味を解説し、最後本多日生現下吹込レコー
 ドを演奏し、聴者悉くさながら現下に接して
 聞くがごとく、唱題の裡に、杖を終る。當日
 は附近の町村よりも來聴者あり、百名の參會
 者にて一同法恩に浴びて喜びの半日を送る。
 (雲歩稿)

著音機 ドーコレ

大僧正本多日生師吹込

- 一、宗教信仰の必要
 - 二、佛教信仰の歸結
 - 三、佛教の卓越せる所以
 - 一、學語
- 二枚四組二圓四十錢(外二送料三十錢)
 取次所 統一編輯局

本多日生現下著小冊子

- (現在品のみで、實切れ絶版になつたものは注文
 さると、と餘計な手数で困ります)
- 自我 偈 講 義 一部金廿錢送料金貳錢
 - 修法勸行の心得 十部金壹圓送料共
 - 宗教の五綱 一部金十五錢送料貳錢
 - 教育勸語と思想問題 十五部金壹圓送料共
 - 一部金拾五錢送料共
 - 一部金壹圓送料共
 - 十部金壹圓送料共

名古屋 市東區田代町 城山
 統 一 編 輯 局
 振替名古屋一〇八一九
 多数購讀の態は特別割引御照會下さい

來ル四月十一日ヨリ十三日ニ至ル 三日間修行

- ◎大法會
- 一、國禱會法要
 - 二、祠堂施先祖靈法要
 - 三、財團翼賛員祖先靈法要
 - 四、關東及山陰東部地方大震火災
映死之精靈追善法要
- 每日 午前九時 法 要 管長本多大僧正
 午後一時 法 教 外、全國布教師
 午後三時 說 教 十 名
 十一月十二日 午後七時講演 教 十 名
 兩 十三日午後七時 顯本健兒會大會 布教師數名
 右相營候條練合御參詣相成度此段御
 案内申上候也
 追而準備之都合も有之候に付御參詣の人員數四
 月五日迄に御通知被下度候

京都市寺町二條下ル(電車ハ寺町二條下車)
 總本山 妙 滿 寺
 法 要 部
 電話 五八十六番
 振替口座大阪四六二五九番

社寺建築 及 臺灣檜材の安價提供
設計監督

(三年以上水蓄乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の計設又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候
追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候
(充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水蓄不十分なる檜材は于割狂ひ等の缺點多きものであります)

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地

(明治神宮外苑内日本青年館正門前)

社 寺 工 務 所

(電話青山六〇二八番)

神奈川縣 鶴見町

社 寺 工 務 所 鶴 見 支 所

福岡市外堅箱町馬出松原

社 寺 工 務 所 福 岡 支 所

(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社 寺 工 務 所 大 阪 支 所

(電話西三二二〇番)

臺灣檜材の特大特徴

- 一、耐久防腐
- 二、蟻害絶無
- 三、香氣清楚
- 四、木質堅緻
- 五、木理整然
- 六、木色高麗

一統定價

一冊	金貳拾錢	送料五厘
半冊	金壹圓貳拾錢	送料共
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	送料共
前金		事之

一統廣告料

表紙一頁	金貳拾圓
一頁	金拾圓
一頁	金九圓
四分一頁	金五圓
前金	
事之	

大正十五年

二月十七日印刷納本

三月一日發行(第三百七十二號)

不許複製

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地

編輯所

印刷所

發行所

編輯所

印刷所

發行所

編輯所

印刷所

發行所

編輯所

印刷所

發行所

本多日生

井村日成

長谷川義一

佛教徒と釋尊に還れ

信行の基調を説ける觀普賢經

嘘地獄

記事報導

第三十三年四月號

統

一